第六席　三願轉入と宿善

如信樣と覺惠法師との對論

一　あんた方も御承知か知らんが叢林集といふ書物の中に宿善の事が出て居る。昔から宿善といふ事は餘程難しい事となつて居る。宿善といふ事で一番肝要な事は、如信樣と覺惠法師との爭ひである、覺惠法師は御開山の弟、如信樣の叔父さんになつて居る、此の方は宿善往生をたてられる、二代目の如信樣は信心往生を立てられた。こゝ大變な爭ひがあつた。眞宗では宿善に限ると見えたり、宿善

三恒値佛の因緣

が無いならば、此の第十八願の謂れは聞えんとある、所が、此の宿善といふ事は私がいふまでもない事であるが、三恒値佛の因緣といつて、道綽禪師の安樂集に詳しく出て居る。三恒値佛の因緣といふのは、三恒河沙の諸佛の出世のみもとにあつてやつて來たものでなければ此の法は聞えん、あんた方聞いても解らん筈ぢや。あんた方、よう知つて居る人もあらうが、私は東海道に約三十年ばかり行つて同行に接近して話をして居るが、今日、先づこれなり御淨土へ參れようと思ふ人が何人あらうか、東海道は隨分廣い、尾張、美濃、伊勢、大分廣いが、其の中であの人こそ御淨土へ參れるだらうといふ人を指を屈つて見ると、なか〳〵少い、事柄の譯はよく解つて居る、譯は解つて居るが、後生となつたら譯や道理でない、之は私がいふまでもなく、正信偈には難中之難、無過斯難とあり御本書にはたま〳〵信心を獲ば遠く宿緣を慶べと仰せられた、そんなら一世や二世で無い、長い間のお手まはしであつたと慶ばねばならぬ。御和讃に

三恒河沙の諸佛の　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自力かなはで流轉せり

とあらう、三恒河沙の諸佛といふのは、皆阿彌陀樣の遍照の光明の働きによつて、御出世なされた方である、其の膝下にあつて吾々長い間自力をやつて來て、今日漸く其の善根を積んだ宿善によつて、阿彌陀佛が眞の佛であるといふ事を知るやうになつた。大經では下卷に、難中之難無過斯難、これより難い事は無いとあり。御和讃には、

一代諸教の信よりも　弘願の信樂なをかたし
難中之難ときたまひ　無過之難とのべたまふ

とあつて、却々之は貫ひ難い。

三願轉入と宿善

二　三願轉入といふ事は、御開山が化土の卷に信仰の經路を述べて、昔は十九願であつた、それから二十願になつて、とう〳〵今は、一たびは〳〵の御念力が屆いて十八願の行人となつた、とお話になつて居る。どうして見ても、初めは十九願に這入らなければならぬ、それから二十願、最後に第十八願、なか〳〵道が遠いわ、そこで十九願の宿善の人は一代の間十九願ではてゝしまふ、二十願の宿善の人は一代二十願で果てゝしまふ、法は十八願を聞き乍ら十九二十の宿善しか無いものは十九二十で終る。自分にも經驗があるが。

二十願の宿善の實例

三　私が初めて尾張の國に這入つた時、二つの潮流があつて戰つて居つた。其の時分、一番えらい、此の人なら本當に聽聞して居るだらうといふ同行が一人あつた、それは尾張の海岸の方で非常な喜び手であつた、又非常な熱心家であつたが、其の人が二十願にとゞまつて居る。そこで私が、お前さんそれはあかん、南無阿彌陀佛の謂れはそんな事と違ふ、といつたが、それは、自分の機はまつくらがり、まつくらがりの此の機を阿彌陀さんがお助け、臨終まではどうもならん此のあかるくなれん此のまゝ淨土に連れ込んで下さる、かういふ信仰である。所

が、幾ら言ひきかしても直すことが出來ぬ、かういふ譯だから直せ、といふと、直します〳〵と云つて居るけれども、直またもとへもどる。此の人は尾張の國では一番聽聞の深い人で、或る時には、人の名前は云はんが、或る京都の俥いお寺さんが行つた所が、此の同行にたゝきつけられて夜逃げをした位の同行であつた。此の同行は却々私とは仲がよく話もよく聞いて呉れるけれども信仰だけはどうも直らぬ。二十願の宿善の人はそこに止まるより仕樣が無い。今日も其の話をやりたい。

十八願直入の機は少い

四　さて、眞宗では三願轉入を立てる、初めは要門、十九願觀無量壽經の機である。眞門、之は二十願阿彌陀經の機である。門は通入の義といつて、十九願から這入らねば二十願には這入れぬ、二十願の門を通らねば十八願にはどうしても行けぬ。お前さん等、そこの所をよう心得んならんと思ふからよく云つて置く。初めから第十八願頓入の機は無いもの千に一つか萬に一つしか無いもの。どうしても十九願の門をくゞらなければならぬ、其の門をくゞつて眞門といふ二十願の門をくゞる。こゝで私が十九願はかういふもの、二十願はかういふもの、十八願はかうなつて來るといふ譯を話をするから、みんな自分の胸に手を當てゝ考へて見い。

佛教の土臺

五　色々話したい事があるが、先づ佛教といふものゝ土臺から話さねばならぬ。佛教ではあんた方も御承知の通り小乘、權大乘、大乘の別がある。小乘教では聲聞緣覺の教へで阿羅漢とか辟支佛になる事を教へる、卽ち阿含經の如きものである。次に權大乘、之は日本には奈良に一箇寺ある、法相宗といふ宗旨がそれである。日本にあるのは、日域大乘相應地といつて皆大乘である。所が權大乘といふのは詰り唯識などがそれ、之は菩薩になる事を教へる。それから大乘教といふのは佛になる事を教へる宗旨、之は華嚴宗、天台宗、眞言宗といふやうな宗旨。之をお經でいへば華嚴經であるとか、法華經であるとか、涅槃經であるとか、維摩

經であるとか、皆大乘經である。

所が大乘教で佛になる事を教へた宗旨は、日本で一番盛んになつたのは天台、叡山等では傳教大師が、眞言と天台とをお傳へなされた。御開山時代は天台は天台と眞言と一緒になつた宗旨であつた。高野山は弘法大師が殊に眞言と禪とを傳へた。此の間登つたが高野は實によい有難い所ぢや。

大乘教の教へる處

六　所が此の大乘教の教へる所は、煩惱卽菩提生死卽涅槃。眞宗も大乘であつて殊に、頓中頓圓中圓。御和讃に、

本願圓頓一乘は　逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體無にと　すみやかにとくさとらしむ

とあるがそれである。所が小乘教といふのは、日々夜々に欲しい憎い可愛いとやつて居る、此の煩惱を斷じなければならんといふ、大乘佛教の方は、欲しい憎い可愛いは體について起る奴であるが、久遠劫來より迷ひのもとゝなる一つの煩惱のもとゝなるものがある、欲しい憎い可愛いといふものは、其の生々で變れども、靈に薫じついて居る久遠劫よりもつて來た迷ひの根元が一つある、これを斷じなければいかんといふ。小乘教と大乘教は斷ずる品物が違ふ。お前さん等讀むであらう。

小乘教と大乘教との相異點

この光明の緣にあひたてまつらずば、無始よりこのかたの無明業障のおそろしきやまひの、なほるといふことは、さらにもて、あるべからざるものなり。

あれは欲しい憎い可愛いと違ふ。大乘佛教に斷ずる品物は根本無明といふもので、根本の煩惱を斷じ盡す。欲しい憎い可愛いは枝葉になつて居る。欲しい憎い可愛いは其の生毎に變れども變らんものは無明業障の恐しき病、欲しい憎い可愛いは人間と犬や猫とは違ふ、其の變る煩惱の奥に變らぬ本の品物が一つある。それが無明業障の恐しき病。そこで眞宗は大乘佛教であるといふ事をよくわかつて貰はなければならぬ。欲しい憎い可愛いといふ奴は體について其の生々變るの

である、猫の前に一圓札と鰯の頭を出したらどつちを取るか、猫が一圓札をくはへたといふ話は聞かん。人間からいへば一圓札の方が餘つ程まし。一水四見といふことがあつて、一つの品物でも其の生が變ると、見方がかはる、餓鬼は水を火と見る、――魚は水を自分の棲家と見る、人間は水と見、天人は瑠璃と見る、欲しい憎い可愛いは其の生々で變れども、三界を流浪して居る間、變らぬものは無明業障の恐ろしき病、此の根本無明を斷じなければ佛にはならぬ。之が大乘のたて方であるが、之は私がいはなくても御和讃を讀んだら直ぐ解る。

彌陀成佛のこのかたは　いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく　世の盲冥をてらすなり

世の盲冥をてらす

盲冥といふ字の横の方にめしひくらきものなりと書いてある。めしひくらきといふのは盲、まつくらがりといふこと。それから其の先に、

佛光照曜最第一　光炎王佛となづけたり

三塗の黑闇ひらくなり　大應供を歸命せよ

お前さん等、御和讃を歌でも歌ふやうに讀むと解らぬ、よく〳〵氣をとめて戴くとわかる。

阿彌陀さんが五劫永劫の心配をして阿彌陀といふ佛になつて、十劫此の方何してござる、法身の光輪きはもなく、世の盲冥を照すなり、後生となつたら盲ぢやぞ、未來となつたら目なしぢやぞ、其の盲、目なしを引受けるために坐るにひまなく待ち兼ねて居る。これには欲しい憎い可愛いといふ事は關係せぬ。欲しい憎い此の機のなりである。此奴が往生の邪魔になつたり地獄の業因になつたら大變。凡夫直入の本願、それで有難い。凡夫が凡夫なりで佛になる所が有難からう。これで大體の事は解るだらう。

汎爾、係念の宿善

七　そこで十九願の宿善の人は汎爾、係念の宿善といふが、之は鎮西派の宿善で、眞宗には立てぬ、汎爾といふのはバツとした、今日お座があるで參らうかといは

一世や二世ではいかん

れてもジッとして居る、仕様ことなしに參つても、あの坊主は妙な顔をして居るとか、變な事を云つたとか、思ふ位で、一向後生とも菩提とも思はぬ間。係念といふは、段々參るに從つて念ひを係ける、これだけでも一世や二世ではいかん。昨日も云つたゞらう、お前さん等の一町内に百軒家があるとしてみよ、お寺に說敎があるから參らうと云つて參る家は何軒ある、何軒もなからう、眞宗の門徒であり乍ら無からう。それが時々參つて見て御信心貰つて御淨土へ參らうといふ望みを起すまでには、なか〳〵一世や二世ではいかん。お前さん等はえらい宿善の多い人といはなければならぬ。三恒河沙の諸佛のもとで自力をやつて來たから南無阿彌陀佛の一聲も唱へ、おまけに御淨土へ參らうといふ心を發す、汎爾、係念の十九願の宿善となつた。それでも一日や二日の聽聞ではいかん、これでも五年や十年はかゝらねば十九願にも這入れぬ。一返にちやんと第十八願に這入らうと氣張つて居る、田舍から態々京都へ上つて來て、一返に御信心を握つて歸ら

汎爾係念は十九願の願

う、と氣張つて居る人があるかも知らん、京都の總會所へでも行つたら御信心が頻ぺタにでも當るやうに思つて居ると大間違ひ、御信心は田舍の方が餘程貰ひ易い。態々御信心拾ひに京都迄出掛る必要はありやしない。

汎爾、係念の宿善といふものは眞宗から見ると十九願の宿善、それから段々參つて居ると御信心貰ひ、參らせにやおかん、助けにやおかんの御慈悲に安心して來る。それで有難うなるは、之でも三年五年では出來ぬ、十年位かゝる。其の出來た御信心はどうぢやと云つたら、此の地獄より行場の無い此の奴を、今命終つても參らせて下さるに間違ひない、あなた御一佛と夜明けしました、それを信心とするだらう、之が十九願、聞きそこなふなよ。

御信心貰つたはよい、疑晴れたはよい、阿彌陀佛御一佛になつたはよい、御化導聽聞しても自分の胸によくあふ。所があはん所が一つある、どこがあはんかといふと今夜でも行かんならんが、そこは何にもつかまへ所が無いぢやらうが、

見えんのが當り前

こんなものぢやらうか、とやるのが十九願。

こゝまで來るとどうやるかといふと、之は煩惱に眼さへられてと仰しやる、見えんのが當り前、知れんのが當り前、わからん所は凡夫ぢやで、臨終までどうも此の機はならんと落着く、參らせて下さるに間違ひないとなつた思ひ、思うた思ひを往生の間に合はす、それが十九願ぢやぞ。之は意業募りの要門、觀無量壽經の機。かう落着かねば裁きがつくまい、そこで往生には信心が肝要だから、信心を貰ふ、信心を貰うてこれで助けて下さるに間違ひない、と凡夫樣が決めて落着きなさる。阿彌陀樣は滅多な人で無い、私の胸はよう御承知ちやで、今行かんならんとなると何にもないが、滅多なことはなさるまい、かうやつて寢込む、危い所ぢやネー、これで一代の間果てる人が澤山ある。かういふ人は御化導にはあふが悲しいことにあはん所が一つある、後生大事と踏み出いて見たら何にも無いがといふ奴が殘るぞよ。そこで苦しくなつて始末がつかんから、凡夫ぢやで煩惱

凡夫樣が決めて落着く

に眼障へられて此の機はどうもなれん、出て來るな、寢て居れよ、ナンマンダブ〳〵とやるぢやらうが、苦しうなつて來るとやらねば裁きがつくまいが、之が十九願の自力の要門、知恩院樣はこれでよい、之を心存助給口稱南無阿彌陀佛といふ。知恩院樣では、參らせて貰ふに間違ひないと夜明けしたが信心、疑晴れたが信心、さうして凡夫で此の機は臨終までどうもならん、墮ちるより仕樣が無いから臨終の夕にお迎へを受ける、お前さんよう似た所がありやしないか、眞宗では參らせて貰ふに間違ひないは信心にせん、それは後念の慶び、眞宗のは一念といふ信心、たつた今萬劫の命拾ひをする所がある。そこをよう聞分て貰ひたい、今死んでも參らせてお吳れるに間違ひないと思ふ思ひは棺桶に這入るまで相續する。之は後念の慶び、眞宗では一念と多念といふ事を立てる、御助けありつると御助けあらうずると二つたてる。墮ちる機お助け、たのむ機お助けといふ事は死んでからで無い、今ぢや、今お助けにあふのを一念といふ。參らせてお吳れる

知恩院樣はこれでよい

宿善の厚い人は其處に居られぬ

に間違ひないは後念の喜び、淨土眞宗ではたのむ一念の所肝要、たつた一念ひに萬劫の命拾ひをさせて貰つて、何時でもと慶ぶ。

所が十九願の機が宿善の催しにあづかつて、宿善の厚い人ならそこに居られぬ。愈〳〵となると人は大丈夫といはつしやる、確かなといはつしやるが、俺はさうはいはん、それがチラ〳〵目につく、御和讃を讀むと。

超世の悲願きゝしより　われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねば　心は淨土にすみあそぶ

人は皆大丈夫と喜ばつしやるが、私はどうもさうなれん向ふさんは大丈夫と云つて居られるが、俺の方は丈夫で無い、後生大事に氣が附いて來た。そこで其の人はこゝは凡夫ぢやで明かにならんが當り前ではじつとして居られぬ。どうも氣持が惡い。

二十の願へ這入る

八　それから十九願から頭を出いて二十願に這入る。そこで悧口さうな有難さうな同行の所へ行つて、私はち墮る機の此の儘參らせてお呉れる御本願を疑ひもせず、何時死んでも參らせて貰へると安心もし喜んで居る。けれども愈〳〵となると、何にもつかまへ所が無い、之は凡夫ぢやで、とやつても、此の機はどうもなれん機と解つて居つても、此の機一つが邪魔になつて〳〵仕樣がないがこゝはどうしよう、と相談した。さうしたら其の有難相な同行が、それはお前さん我が機を眺めるからいかん、と敎へた。そんならどうしよう、我が機ながめず、阿彌陀樣の御手丈夫な所に目をつけよ、うまい事を聞いたと思ふは、今迄は彼奴相手にして居つたからいかん、我が機眺めてはいかん、所が、ヒヨツト今夜でも行かんならんとなると、また出て來る、あツ出て來た、此の機ながめてはいかんナンマンダブ〳〵〳〵此の機はどうもならんやつ、此奴相手になつてはいかんナンマンダブ〳〵〳〵やるぢやらう。此方は變り通しても變らんお慈悲が丈夫ぢやで、こつちやは墮ちる奴なれども墮さんお慈悲が確かぢやで、御淨土參りはどうする、

ヒヨツト今夜でも

お佛壇の下からナー阿彌陀さん

此方は參れる奴でなけれども、向ふが確かぢやで、向ふが〳〵と向ふをつかまへて往生を決める奴、これが二十願の機、あるぞ〳〵、お佛壇の下から顏を出して阿彌陀樣に物が言ひたからう。ナー阿彌陀サン。長い間聽聞し乍ら十九願に止まつては殘念で無いか、二十願に止まつても殘念で無いか、之を十九願の自力、二十願の自力といふ。

然らば第十八願の宿善はどうなるか、十九願の機の如く、此機は凡夫ぢやで臨終まではどうもかうもならん、之は明かにならんが當り前とやつて見たり、向ふさんの御助けに疑ひ晴れて居れば此の機はどうもならんとやつて見ても、二十願の機の如く、此の機相手になつてはならん、向ふが丈夫ぢやで、とやつて見ても、愈〳〵後生に大事をかくりやかくる程、此の機一つが邪魔になつてと出て來にやならぬ。御化導聞かせて貰ふ事も要らぬ、何一つどこに不足もございませんが、いよ〳〵となつたら、此の機は間に合はぬ機とはねて見ても、此の機はどうもならん機とやつて見ても、大事をかくりやかくる程此の機一つが邪魔になつて、と出て貰ひたい。之が第十八願の宿善。そこには十九願二十願を通らねば出て來ぬ、十九願も二十願も自力といふ、十八願だけ純他力。

十九、二十を何故自力と云ふか

九　十九願二十願を何故自力といふか、無明業障の恐ろしき病をば我が手で始末をつけるから自力、我が手で始末のつかん事になつて阿彌陀さんに始末をつけて貰ふが他力。自力と他力は解つたか。十九願の間は、此の機は、煩惱に眼障へられて居るで臨終迄どうもなれん、自分で始末をつける。二十願は此の機ながめてはならんと自分で始末をつける、自分の手許で始末をつけるから自力。十八願は、我が手で始末がつかん事になつてまかせよ、を聞くのぢや。十九二十でやつてやりぬいて、信心拵へや、お助け丈夫や墮ちんと氣張つて見て、いよ〳〵となつて宿善の催しにあづかり、我が手で此の機が始末がつかず後生となつたら待ちかねでござる六字の謂れを聞く。六字の謂れは他に聞いたら駄目。

愈〻今と踏み出でたら、聞いた事も用には立たず、覺えた事も間に合はず、知つた事も役に立たぬ、信じた事も間違ひない大丈夫と思つた思ひも、サアとなつたら何ンにもない眞つ闇がり、此奴一つをどうしませう、と出て來い。こゝに彌陀の本願、墮ちる機お助け、たのむ機お助けを聞く。

此奴一つをどうしませう

それはそなたの胸の中で、たつた今となるとその機が目について困つて居るだらうが、此の彌陀は久遠劫の昔から其の機一つが泪の種。墮ちる機お助けはこゝにあるぞ、墮ちる機がお助けにあふのはこゝより外に無いぞ。御助けにあづかるお慈悲には疑ひ晴れ、參らせて貰ふ御本願には露塵程の疑ひは無い、今命終つても此の儘參らせて貰ふと落着いて安心して居る、大丈夫と夜明して居る、さて後生となつて今夜でも行かんならんと大事をふむと何ンにも無い眞つ闇がり。かうなつたら聞いた事も用には立たず、覺えた事も間にあはず、知つた事も役には立たぬ。御助けと思うた思ひも、間違ひないと思うた思ひも大丈夫と思うた思ひも。サアと踏み出しや何ンにも間にあひませぬ。あるものはたゞ方角なしの眞つ闇がり。これなら出しよからう、之をかくいてよいものを出さうと思ふから困る。

サーと踏み出しや何ンにも間に合はん

彌陀成佛のこのかたは　今に十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく　世の盲冥をてらすなり

一番惡い奴を出せ、そなたはたつた今其の機が目について困つて居るだらう、久遠劫の昔から今日まで、坐るひまなく立ち乍ら、われにまかせよ、と俺は呼び通しに呼んで居る。行場知らずば此の彌陀にまかせよ、方角たゝずば此の彌陀にまかせよ、墮ちん心配も此の彌陀にまかせ、參る世話も此の彌陀にまかせ、行ける行けんの世話だけは此の彌陀にまかせ、確かになくばそこ受持たう、しつかりなくばそこ引受けよう、解らん所は此の彌陀が受持つてやる程に、そつちや向かんと置け。

それから先きは此彌陀が護つて離れはせんれつてはせんなん

然らば私はどうしよう、それからさきは此の彌陀が護つて離れはせん程に、墮ちたらそなた一人はやりやせんで、此の彌陀も共に焰の中までも離れん約束が、若不生者の誓故、そなたの方はどうせる事も、どうなる事も要らん、そなたの心の落着は、そなたの心の安心は、離れん親をば當にするばつかり、つき添ふ彌陀を力にするばつかり、親と一緒なら來る氣になるばつかり、われをたのめ。

十　其の勅命の受手前、そんな事とは存じませなんだ、そんな事とは知りませなんだ、たゞ今迄は信心貰つて、疑ひ晴れて、立派になつて、御化導聞いて、これなら參らせて貰ふ、これなら助けて貰ふと心のきまりがついてからそれからお引受けにあふのぢやと思つたで、長い間、信心貰ひや疑晴れる事ばかり心配して、いよ〳〵となつたら何ンにもないが、此の機は〳〵〳〵と、此の機を邪魔に邪魔して、ながい間困りました。あなたの六字の勅命承りや困るのではなかつた、此の機引受ける彌陀であつたのぢやな、と衆生が阿彌陀如來に向ふ所。

十九、二十の機が十八願へ這入る

こゝはよう腹に入れて置かんと向きが違ふと大變。十九、二十の機が初めて十八願に這入る、此の事は實に難中之難無過斯難、お前さん、年中お寺へ參つてまた、もとの三惡道に行つては阿呆らしい、こんな詰らん事は無いで、よく腹底をきめて聽聞して貰ひたい。